

唄三堂南古墳

1989年3月

池田市教育委員会

嬉三堂南古墳

1989年3月

池田市教育委員会

序 文

池田市は、猪名川が北横山地を貫き、平野部に山たところに位置し、いわゆる谷口集落として発達してきました。こうした恵まれた地形により、古くから生活の舞台になり、その証として多くの文化財が残されています。この中には茶臼山古墳、娘三堂古墳、あるいは鉢塚古墳のように、全国的にも著名なものがあります。

しかし、市内に残された古墳は、開発によって無残にも破壊され、現在13基を数えるにすぎませんが、このように僅かに残された古墳は文化財の保護に対する市民の熱意や所有者の理解によって大切に守られています。文化財の保護にとって、何よりも市民、所有者の熱意や理解が必要不可欠であり、私共もこれに答えるよう、より一層努力してまいりたいと思います。

今回報告します娘三堂南古墳は、不幸にも未確認のまま工事によって破壊されたものであります。このため、現状保存することができず、やむをえず発掘調査を実施いたしました。本墳が発見された経緯を考えますと、私共の努力によっては、現状保存することが可能であったと思われ、文化財の所在を十分に把握することの重要性を感じしております。

なお、調査に際し、関係各位より御指導、御支援を賜りました。末筆ではありますが、心より感謝いたします。

平成元年3月

池田市教育委員会
教育長 片山久男

例　　言

1. 本書は、池田市綾羽2丁目2127番地に所在する第一堂南古墳の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は池田市教育委員会社会教育課文化財係が実施し、田上雅則が現地を担当した。
3. 本書の編集、執筆、写真撮影は田上が行った。また、本書を作成するにあたり、野村大作、石賀英樹、橋田正徳の協力を得た。
4. 本書で使用する色調は、『新版標準上色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修）による。

5. 調査にあたっては下記の参加があった。

野村大作、石賀英樹、橋田正徳、中山孝、大戸満成、栗田哲夫、赤井正博

本　文　目　次

I. はじめに.....	1
II. 古墳の位置と周辺の遺跡.....	2
III. 調査の概要.....	6

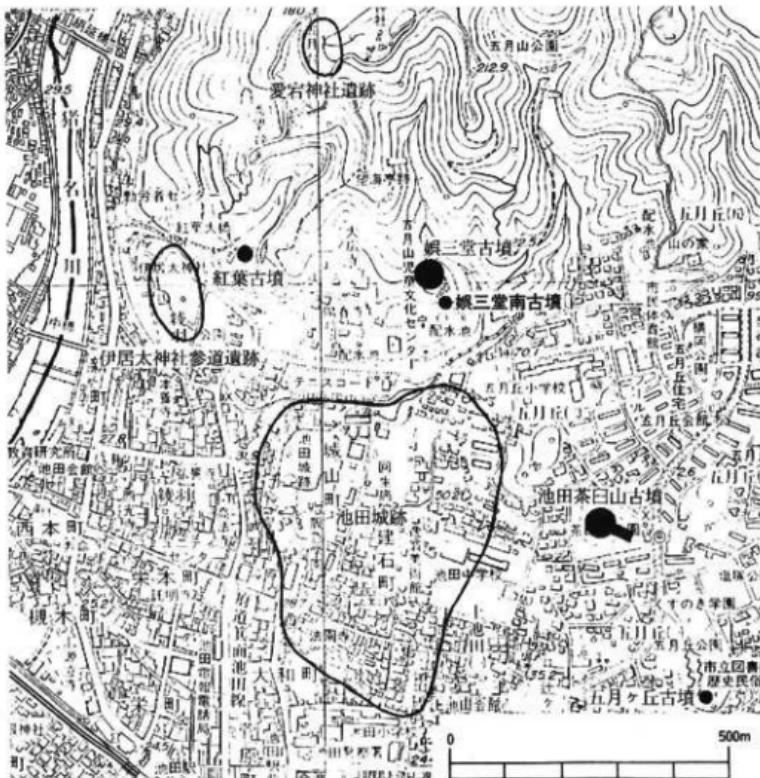
図　版　目　次

図版 1	(1) 古墳遠景	(2) 調査前の状況
図版 2	(1) 周溝検出状況（東から）	(2) 同上（北から）
図版 3	(1) 石室及び掘り方（南から）	(2) 同上（西から）
図版 4	(1) 掘り方検出状況（北から）	(2) 出土遺物

I. はじめに

池田市のほぼ中央には、北摂山地の一部である五月山塊が占め、その南には緩やかな丘陵が形成されている。この丘陵には旧石器時代から今日に至るまで人々の生活の舞台となり、その証として多くの遺跡が所在している。

池田市において確認されている古墳は現在までに21基を数えるが、このうち14基が五月山塊南側の中腹及び丘陵に分布している。この中には池田茶臼山古墳、娘三堂古墳などの前期古墳、巨大な横穴式石室を有する鉢塚古墳、後期の前方後円墳と考えられる二子塚古墳があるが、そのほかは小規模な後期古墳である。この小規模な後期古墳の立地を見ると、五月山塊中腹の尾根上にあるものと緩やかな丘陵上にあるものの二者が見られる。こうした立地の相違が



第1図 周辺遺跡分布図

埋葬主体部、墳形等の構造として表われているか否かは、大部分が未調査で、しかも、中には未調査のまま消滅してしまったものもあり、具体的に把握するには至っていない。また、池田城跡下層で検出された墳丘が完全に削平された後期古墳に示されるように、その存在が知られないまま消滅してしまったものも予想され、池田市内の古墳を考えるには必ずしも資料が整っているとは言い難いのが現状である。

今回報告する娘三堂南占墳は上述した小規模な後期古墳の一つで、五月山塊の中腹に築造されたものである。昭和58年に大阪府教育委員会によって発見されたが、発見時の現状は、尾根を切断する道路の北側崖面に横穴式石室の奥壁と東側壁の一部が残存するにすぎず、崩壊寸前で非常に危険な状態であった。発見後、池田市としてはこれが古墳であり無造作に移動することは文化財としての価値が大きく損なわれると判断したために、適切な保存措置が講じられないうま数か年が経過してしまった。しかしその間、古墳前面の道路が池田市立五月山児童文化センターへ通じ、万が一、石材が転落した場合通行者や車に当たる危険があつたために、市民からの苦情も相次いでいた。市教育委員会としてもその対策を考慮していたが、近年、特に石室下の流土が激しくなり、早急に保存対策を検討しなければならなくなってきたところへ、五月山緑地都市緑化植物園工事に伴い本墳の所在する崖面が整備されるという計画が具体化されることとなった。このため市教育委員会と池田市上木部公園課との間で本墳の取り扱いについて協議を行つた。この結果、本墳を現状のまま保存することが本筋ではあるが、現場が垂直な崖面で、しかも、石室がややオーバーハングしているため工法的に困難であり、また、たとえ現状のまま保存したとしても人災を招く恐れがあることから、発掘調査を行つた後、石室を移築することで意見がまとまった。

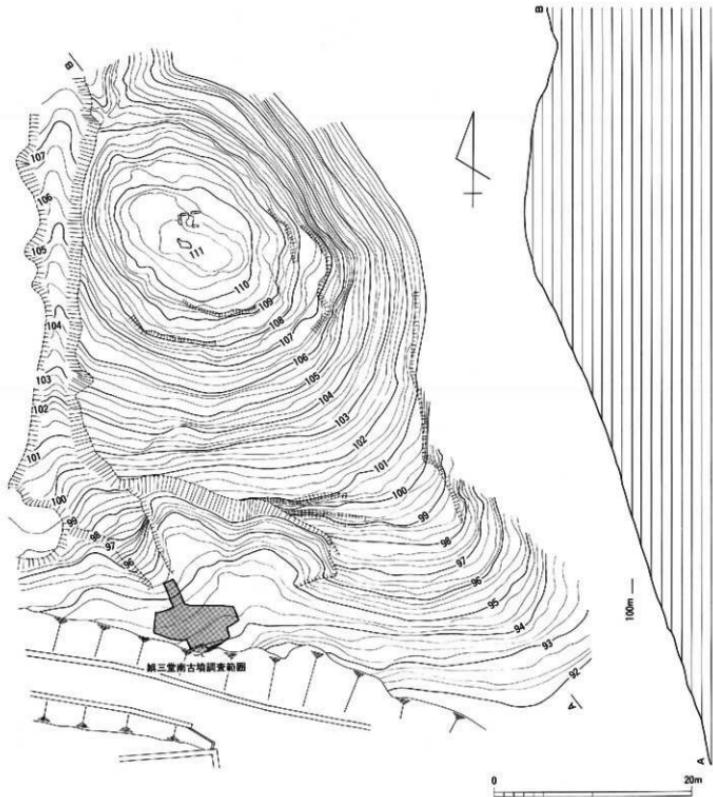
発掘調査は、本墳が上述したように危険な状態であることから、墳丘の規模、時期等の資料を得ることに主眼を置き、また、事前に古墳周辺の地形測量を行つた。

調査は、池田市教育委員会社会教育課文化財係が実施し、昭和63年6月30日に着手、同年8月2日に終了した。

II. 古墳の位置と周辺の遺跡

娘三堂占墳は池田市綾羽2丁目2170番地に所在する。本墳は五月山塊から南方へ派生した尾根鞍部のやや西方に下った地点に築造されており、標高は約90mを測る。この前面には猪名川によって形成された沖積平野が広がり、これを一望することができる。

周辺の遺跡としては、すぐ北側には画文帶神獸鏡が出土した前期古墳の娘三堂古墳が所在する。今回の調査を機会にこの娘三堂古墳の墳丘測量を実施したので、ここでその測量成果について若干触れておきたい（第2図）。



第2図 姫三堂古墳及び周辺地形測量図

本墳は娘一堂南古墳の約40m北方、南へ派生する尾根の鞍部に築造されており、標高は111mを測る。現状は山林となり、部分的に果樹培養に伴う改変が見られる。また、古墳のすぐ西側は大きく土取りが行われ、一部墳丘が失われている。墳丘については昭和39年に測量調査が行われ、径30m、高さ5mの円墳と報告されたが、南側の改変を受けていた箇所に前方部の存在する可能性も示唆されている。今回作成した測量図を見ても、前回の測量当時の現状と大きく変わっていないようであるが、墳丘規模については若干異なるものと思われる。墳丘は、西南部が原形をよく留め、また、北側には尾根を切断し墳丘を整えた箇所が認められる。しかし、東北側は急斜面になっていることから墳丘が大きく崩れており、現状は梢円形を呈している。墳丘の規模については、墳頂に散乱する天井石の位置を墳丘の中心とし、西南部の原形を留める箇所及び北側の尾根切断部の位置から判断して、径30m、高さ4mの円墳と見れなくもない。しかし、東南部において、尾根筋の方向へコンターラインが若干張り出しており、あるいは前方部の存在も考えられる。仮にそうであるとしても、本墳の立地する地点より尾根筋が急激に下がっていることから、やや短めの前方部を有するものと推定され、上述した、墳丘北側の尾根切断箇所からその全長を求めるに、30m強の小規模な前方後円墳と考えることもできる。

娘三堂古墳の東側には、杉ヶ谷川を挟んで東南方向へ細長く丘陵が発達し、その鞍部には前期古墳として著名な池田茶臼山古墳が築造されている。この池田茶臼山古墳は昭和33年に発掘調査が行われ、数回に及ぶ盗掘を受けていたものの、竪穴式石室内部より碧玉製石劍、同製管玉、ガラス製小玉、上師器が出土し、また、墳丘より2基の円筒埴輪棺が検出されている。他に、池田茶臼山古墳が築造された丘陵の南端部には陶棺を有する五月ヶ丘古墳が所在する。

古墳以外のものとしては、五月山頂部に高地性集落と考えられる愛宕神社遺跡、五月山から西方へ発達した台地には、旧石器時代から縄文時代の石器が採集された伊居太神社参道遺跡や弥生時代中期～後期の土器が出土した五月山公園遺跡が所在する。また、五月山から南方へ大きく発達した台地には中世城郭の池田城が築城されており、現在までの発掘調査によって内堀、掘立柱建物跡、庭園跡等の他、その下層から縄文時代晩期の上器、弥生時代中期～後期の遺構、遺物、あるいは古墳時代後期の木棺墓を埋葬主体とする古墳が検出されている。しかし、池田城跡以外、本格的な発掘調査が行われておらず、遺跡の性格や規模等明らかにできていないのが実状である。

註

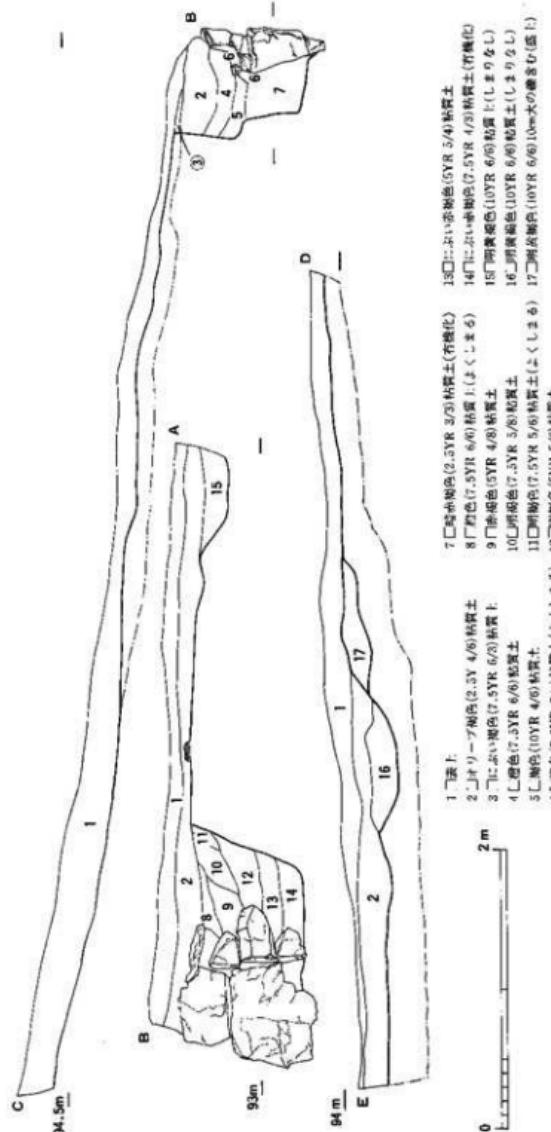
- (1) 富出好久「考古学上に現われた池田」『新版池田市史概説』1971年
- (2) 坪田 直『池田市茶臼山古墳の研究』(『池田市文化財調査報告第1集』1970年)
- (3) 富出好久・橋高和明『五月ヶ丘古墳』(『池田市文化財調査報告第3集』1980年)

III. 調査の概要

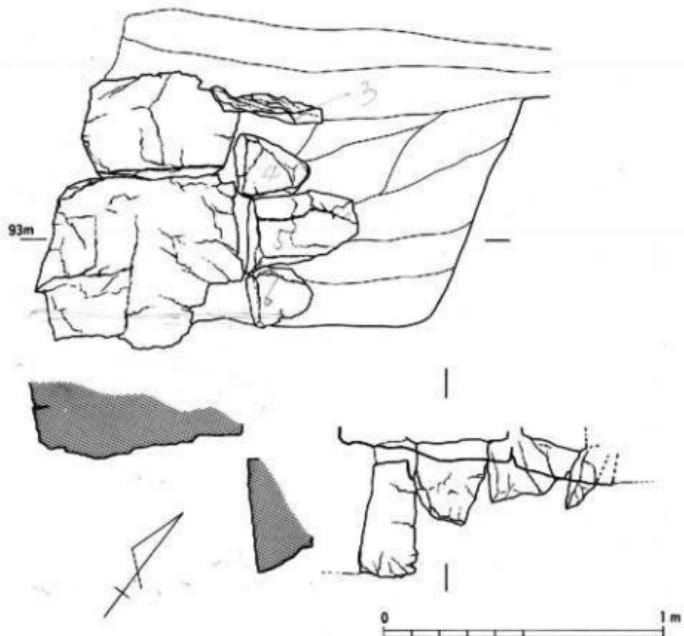
調査は、既述したように最初に本墳から北方の娘三堂古墳の所在する地点まで広範囲に25cmコンターの地形測量を行った。発掘調査は、石室が非常に危険な場所にあることから作業中の安全を考慮し、石室の主軸（奥壁面に垂直の方向）及びこれに垂直に、崖面より2m後退して上層観察用の駐を設定した。しかし、この状態では石室掘り方の観察は不可能であるため、崖面を利用して更に駐を設定し、また、崖面に接して作業用の足場を設置した。

墳丘・周溝

娘三堂南古墳一帯は既に著しく削平されており、当初、墳丘は全く失われているものと考えていた。調査区を設定した後、表土を除去したところ明褐色粘質上の地山が現れたが、周溝は明らかにしえなかった。このため、周溝も既に削平されたものとが考えたが、念のため縦に沿って断ち割りし断面観察をおこなった。この結果、地山に非常に類似した埋土に周溝を確認することができた。周溝は最大幅1.3m、深さ25cmを測り、断面形態は緩いU字形を呈



第3図 石室及び土層断面図



第4図 石室実測図

する。この周溝は東側から北側へ弧を描き、途中で自然消滅しているが、本来、完周していたものが削平によって失われた結果と考えられる。古墳の現状は、周溝を確認した東側に比して北側は50cm高く、それにもかかわらず周溝が残存していないことは、本墳が東南へ著しく傾斜する場所に選地されたために、埴輪の高低差が相当あったことを証拠付けるものと思われる。

墳丘は上述したように削平のため殆ど残存していないが、東側の低位の箇所で一部、挙人の礫を混入した盛土が認められた。

以上のことから本墳は、周溝上縁肩部より石室までの長さから径6.5mの円墳と推定され、高さは東側周溝の底面から求めた場合、少なくとも1.5mはあったものと考えられる。また、築造については、傾斜の著しい場所を選地し、高位の北側及び西側は地山の削り出しを行い、低位の東側は盛土によって墳丘の形状を整えたものと思われる。

石 室

奥壁と東側壁の一部のみ遺存しているにすぎず、また床面も失われている。よって、規模や形状は不明である。ただし、現状では二枚によって構成される奥壁は、側壁最下段より床面と推定される部位から90cmの高さまで残存し、またその最大幅は75cmを測り、それぞれが玄室の

高さと幅を示すものならば、非常に小規模な石室であったということになる。東側壁は4段残存する。石室解体時に判明したことであるが、石材の間際には粘土が厚く見られ、また奥壁との間には大きな空間が認められるため、この側壁は南側へずれてしまい既に原位置になかったものと判断される。

石室の掘り方は、地山面を石室に比して広めに掘り込んでおり、石室背後との間には広い空間を作っている。奥壁側のセクションでは、奥壁1段目の上部と合致するように二段に掘り込まれており、奥壁

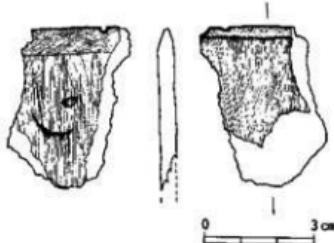
1段目を設置した後、このレベルまで一気に埋め込んでいる。次に、奥壁2段目を小石及びよく締まった粘質土で補強して設置し、粘質土で上方まで埋め込む。一方、東側壁側のセクションでは逆台形に掘り込んでいる。裏込めの土層を観察すると、奥壁1段目の上部と同じレベルまではほぼ水平状態を示しており、側壁の積み上げと同時に背後を固めたことをよく示している。また、これより上部は掘り方から石室背後に向かって斜め方向に埋め込んでおり、おそらく、奥壁1段目のレベルで、石材の積み上げとそれに伴う裏込めがひとまず完了し、石室の平面プランが完成したものと推定される。

なお、掘り方埋土より第6図に掲げた用途不明の石製品が出土した。

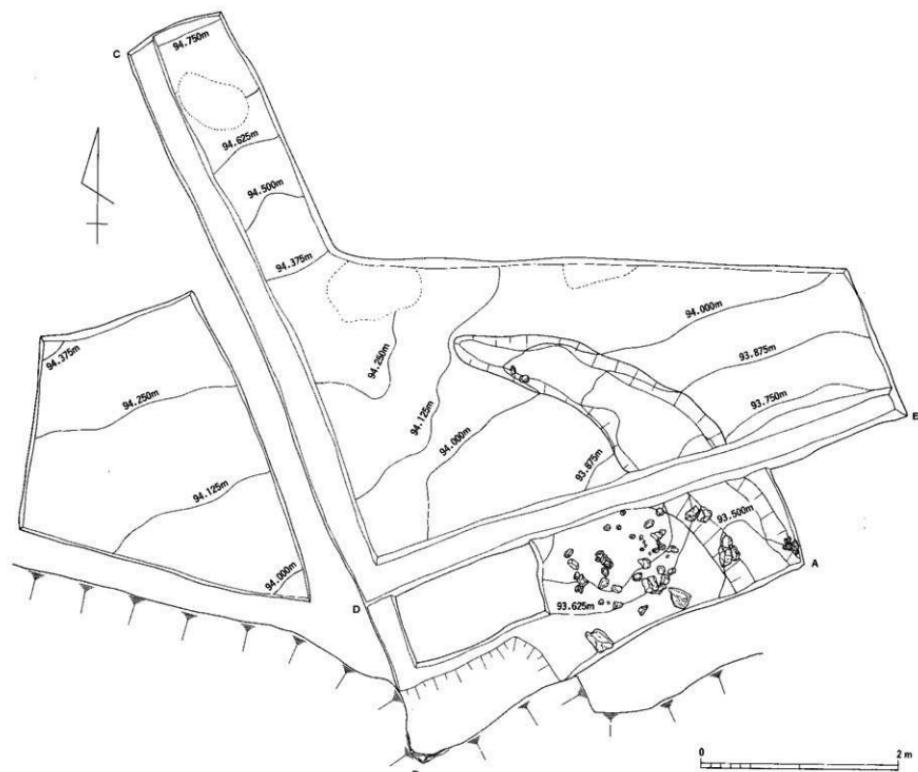
この石製品は、厚さ4mmを測る扁平なもので、両面とも研磨による条痕が残っている。両刃が作られているが、端部には幅1mmの面取りが認められるため、実用品とは考え難い。

本墳は、上述したように、後世の破壊が著しく、特に石室の形態や副葬品などの基礎的な資料は得られなかった。しかし、墳形、規模については、周溝が僅かながら残存していたことから、径6.5mの円墳と推定できることとなった。

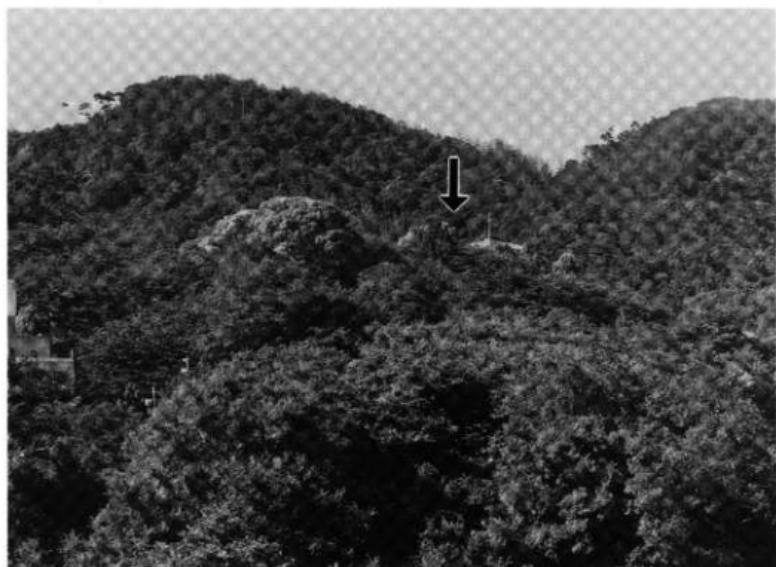
残存していた石室については、奥壁のみ原位置を保っているだけで、しかも崖面に非常に不安定な状態であり、もし、この状態で数か年経過すると、間違いなく転落していたと考えられる。



第5図 出土遺物実測図



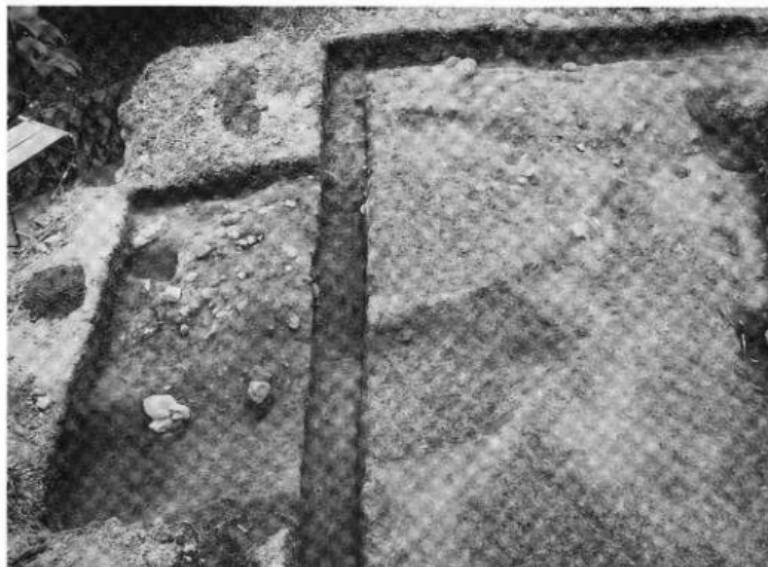
第6図 棟出遺構平面図



(1) 古墳遠景



(2) 調査前の状況



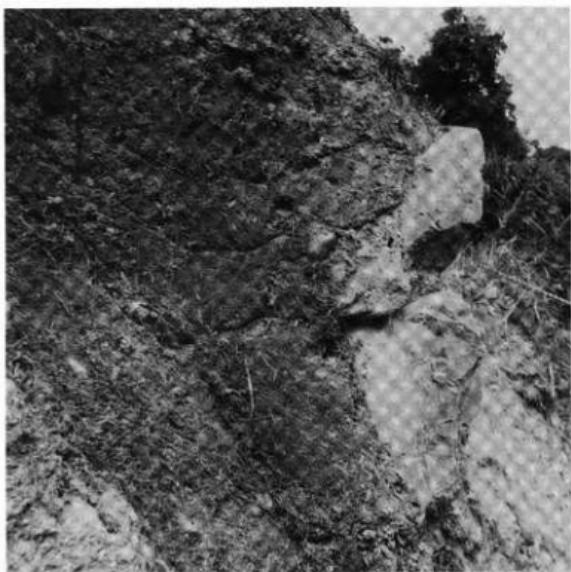
(1) 周溝検出状況（東から）



(2) 同上（北から）



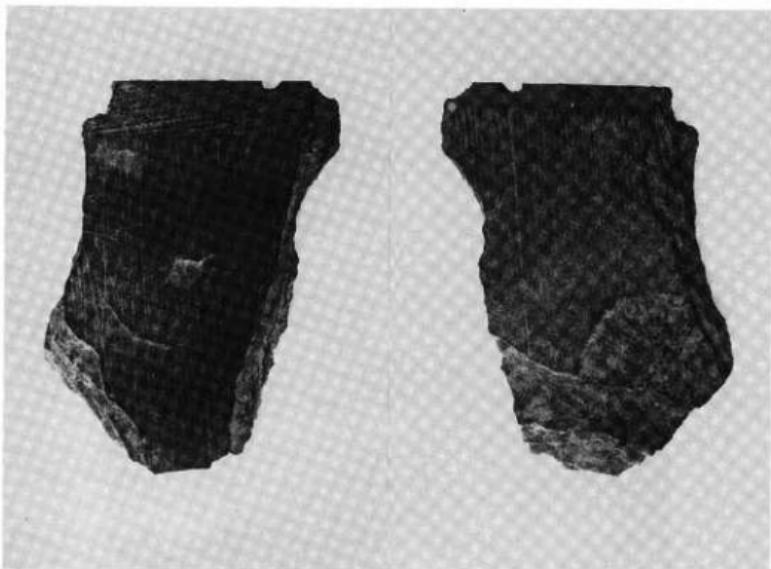
(1) 石室及び振り方（南から）



(2) 同上（西から）



(1) 挖り方検出状況（北から）



(2) 出土遺物

池田市文化財調査報告第9集

蛭三堂南古墳

1989年3月

発行 池田市教育委員会

池田市城南 1-1-1

編集 社会教育課 文化財係

印刷 西村印刷株式会社